3 妙觀察智

〈1〉 妙觀察智

妙觀察智とは宇宙一大精神の一切智態に內容無盡の性相を包含し、實に藏性豐富なること十方三世一切の事理を包含して遺すことなし。例へば應身の釋尊の華嚴三昧海裏に、十方三世一切の依正物心として炳現せざるなきが如く、宇宙全體の內容に含蓄せる物象と心象とを開發し顯示するを用とす。宇宙間一切の物質心質は小宇宙とすれば理性卽ち察智性具せざるものなし。

察智は內容を啓示する性なり。

法佛の察智態は之を察するに難からん。分り易からんが爲めに、法佛の模塑たる釋尊が、所化の衆生を度するに、機根を觀じて說法して其が心靈を啓示する一例を示せば、

釋尊靈山に在て金波羅華を捻つて衆に示す。百千の大衆其意を領せず。迦葉獨り豁然として大悟して破顏微笑す。時に牟尼迦葉が心靈啓發したることを印可するに、我に正法眼藏涅槃妙心あり、今迦葉に附屬すと。

釋尊の察智の光、迦葉の察智を刺激して大悟せしむ。迦葉にして察智熟せざれば華を見て何かあら

ん。他の大衆は各察智を具すれども未だ熟せざるが故に大悟すること能はず。然れども人察智を具せざるものなし。各其分に應じて察智を働かせども靈を開發するに至らざるなり。

また孔子が其高弟顏回に對して、終日回は言はず、愚なるが如し、然れども其私を省れば、以て發するに足れりと。回は一隅を聞いて三隅を知ると。孔子の察智內に動きて言葉に詮表す。一隅あれば回の察智は却て三隅までを發明すと。

すべて人類には察智の性あるが故に、我と彼との言語相通じ意志相ひ會して融通す。

教育に知能を啓發すと云ふも、已に兒童の心性に察智の性、裡より排かんとするに教育を以て之を資けて知能を開發せしむる如き、人類の如きは意識的知能啓發するも、この察智性は、動物にも生物にも、不識的に、此と同じき形式具はれり。

妙觀察智とは意識的の知能なれども、本然智態には物質と心質と同一の兩方面なれば、觀察の主體と資料となる。

生物生活の形式に、植物生殖作用には、雌雄兩性の二細胞相ひ合して、交感孕應して、第二の新植物を發生すると同じく、動物に於ても相ひ異れる兩性の交感結合によりて生殖作用あるが如し。

知能開發に於ては師資の關係によりて資者の智能を開發するが如し。宗教には神人感應によりて心

靈を開發して聖子となすが如し。

大にしては宇宙現象界、天體の彗星の如きは、生れんとする卵にして、太陽に至つては已に開發發達して、圓滿に自己の性能を活動す。

實に無窮の天體は藏性に屬する察智態に開發せられたる自然界なり。

宇宙本體が藏性の察智態とすれば、いかなる處としてか開發的事業の行はれざる處かあらん。

察智には、自然界には天地及び萬物を天則秩序に發生する雌雄交感の如き、また智能開發にも師資の關係をなす如き、自然規定生理的規定の中に、感應受化の性を備へられたり。

察智は人の心理に云はば、知覺思想想像直覺の如き、外は感覺より受けたることに對して之に概念を下し自己の理性に訴へて思想觀察を下すが如き、先天の理性と後天の經驗とを調和し、また判斷する如き、また理性に基きて想像を構成して理想を作り、また感覺より受けたるものを觀察工夫して之を開發す、美的假像之に伴ふ。

自然界

他の刺激によりて自性を開發する性

宇宙は一大靈智に開示せられたる自然的方面とすれば、自然界は相待規定なるも本同體より開展せられたる兩面なれば、相互の感應作用行はれざる處なし。太陽より分娩せられたる地球なるも本同一の物質が今日にしては太陽と地球とは陰陽其性質を異にす。（陰陽とはしばらく俗に從ふ）此の陰陽兩動の交感孚應によりて地球に於てすべての有機物即ち動植物を養生す。陽動が發する能力を陰動なる地は之を受けて、炭酸水窒等を化合して植物を養ふ。

陽春陽氣に感應して爛漫として百花麗しきを呈するが如き、またすべての動物に於ても植物によりて營養を求め無數億兆の生育する、皆此の感應作用によらざるなし。若し天體陰陽兩動の自然的感應なからんか地球に一の生物なきに至らん。

偉哉藏性妙觀察の性。わづか一方面の自然に於てすら是の如し。

ニュートンが物理の法則を發明したるも同じく精神察智にあらずや。

察智は交感受應して孚化す

自然界に生物生理性に於て含有せる察智感應孚化の理は、植物の生殖作用は麗しきを呈し芳しきを流す花の開く時にありて、生殖作用は全く性質の異りたる兩性の二細胞が合一するに依て成るものと

す。或る花の如き雄蘂の葯中に成れる花粉を雌蘂の柱頭に達すれば其水分を吸收して花粉管を經て子房内に達し胚珠の孔を通じて珠心の頂點に達し、胚嚢の原形質より一の卵を變成するのに受精せしむ。而して卵細胞は膜を生じて漸次成長し後一個の新植物を爲すべき胚と成り胚嚢の中に存す。而して胚嚢は胚乳を作りて養ひ以て胚珠は種子となる。

かく植物の感應的作用によりて新植物を造化するは不識的の交感卽ち察智の妙用に外ならず。

察智が心靈的聖靈を交感せしめ孕化して靈化の聖子たらしむるは、意識不識、靈と非靈との區別はあるも、交感孕應によりて聖胎をなさしむる理に於いては同一の形式ならざるべからず。

例へば植物の胚嚢の卵細胞に受精するが如く、吾人が心靈の察智は信と愛との全心全幅を盡して如來の靈應を渴仰す。宗教的衝動神的憧憬等は恩寵を受容せんとの準備なり。

聖靈交感の準備たる人の心理に於ては知力的察智を以て先驅とす。察智先づ三昧に入つて聖靈が旭の如く虹の如くに表象して、また眞金色圓光徹照して端正無比なる表象を以て、察智心靈の曄々となる。聖靈感應し八面玲瓏歡天喜地言語の及ぶ所にあらず。

感應によりて靈胎をなす

問。心靈の聖靈交感を植物の生殖作用に例す。然るに植物に於ては雄蘂の精を受けし雌蘂は胚して種子となる。無形の靈性に於ても客體より聖靈感ずべきもの哉。將た自己の靈性を開發するのみかと。

答へて。此理甚深。本より心靈無形にして質碍の精物ありて感ずるにあらず。然れども宗教にして一の無表物の聖靈の靈感に接せざるべからず。人は本藏性より賦せられたる理性あり。また宗教的衝動たる察智の性は天則理性に具有して、主體は既に準備すれど、自己は個體の生理機能より稟けたる垢質あるのみならず、天然の精神狀態は非靈態なり。此の開發の規定形式は稍や同じきも內容に於ては其相數多なり。

禪門にては一の公案に例へば隻手の音聲によりて專心工夫し、察智の門開く時自己の眞實理性と宇宙の一大理性とは本一體なりと體達す。

吾門に於ては、如來の全德を表明する靈名を專心に稱へて聖靈の實現をいのる。如來の靈性をたしかめ得るは察智なり。察智こよりて靈光現前して如來の大圓覺と自己とは自觀的には無碍一體なり。それより如來眞我中の一員たる我となりて、自我と一大眞我と靈光相ひ交映し、十方洞然として無碍なる中に、若し應身を觀れば、天に旭陽の昇るが如く、眞金色に慈悲と智慧との表象法身卽ち釋迦三

十二相觀念界中に彷徨す。

靈性現じ來れば、主體と客體と異にあらず。然れども植物の受精と同じく、無表色の聖靈を感ずるに非ざれば、全く法王の聖子となつて靈的生命に復活すること能はず。

現じ來れば客體より來りしものなきのみにあらず、從前の主體と計度し來りしものも亡じ、無明滅して明現前す。靈を客體に歸せしめば絕對客體にして、自己已に亡じ去りぬ。全體主體自己の靈性開發し來るも從來の自己にあらず。

心界は寂莫たる月夜の如きのみならず、春日花林に逍遙する極樂界なり。

察智は一大理性の心靈界に微妙莊嚴の美天國を顯はし、大小意に隨ひ、變現意に稱はしむ。

宇宙全體察智態。

四智關係

如來の四智本より別に體あるに非ず。如來本一大心靈の活動について四分類をするのみ。大體よりは圓智の總相より察智等に次第すべきも、この四相を知り易からんが爲めには察智より研究するが便利となす。

此を暫らく、大宇宙の一分たる人類の心理分類にしても、總相の觀念認識より研究するよりは寧ろ感覺知覺より研究するを便利となす。例せば感覺は外界の刺激によりて其相を受容して感官より腦に達し、精神は之に對して感覺し、次に知覺し、記憶想像思想直覺等は知力卽ち察智に屬す。次に執意自我等は理智によりて統一せらる。是れ性智にして認識及び觀念は總相にして圓智に配す。

察智は感覺より受けたる資料に對して、概念より判斷するには、外界の經驗より得たると、自己に存する理性とを、よく〳〵雙方を照會して、正當なる處の斷定を下す。

察智は推理に演繹と歸納の兩方面より推察す。演繹とは先天には萬物は互に隔別の如く孤立的なるも、一の理性に系統せざるなし。故に自己の先天的理性の理智に基きて推理を施す普徧の理系に基づく。歸納とは後天にして感覺より得たる經驗に基き斷定をなす特別の場合を論ずるなり。

演繹は綜合的にして歸納は分解的、二者本より相ひ異るに非ず。感覺と理智との兩面に對する察智の作用なり。

四智の中に於て圓智と性智とは觀念と理性、卽ち相と性とにして、普徧的なり。作智覺智は特殊にして、外界特殊の萬物を受容す。察智は特殊的の象相と普徧性との雙方を照會す。

一大觀念態は普徧的にして不可分割なり。個々無碍交照無碍なり。覺智は宇宙萬象若しは物質若は

心質一として特殊ならざるものなし。特殊の物々と觀念と理性とに一貫せらるゝが故に。一物が普徧の理性に系つて一切に遍す。之を一卽一切と云ふ。一切の物々に各々感覺性ありて特殊的に感覺しながら、普徧性に統一せらるゝが故に、一切が各一切を各交照す。

例へば、顯微鏡を以ても見る能はざる人の感覺元質の小なる物も、其れに無窮の天體無數の星宿を容るゝに餘りあり。一に一切を容收するが如く、一切の個々に、各一切の個々を容るゝ、また然り。圓智の普徧的觀念態と特殊の感覺的の物々との關係は、已に是の如くなるのみならず、人々感覺の奥に察智なるものありて、また同一理性なるものあり。之に依て自己の胸中に智力感情執意等あるが故に、一切の個々にも同一の形式あり、また種々の內容あることを察す。之に由つて觀れば、華嚴の事理無碍、事無碍、理無碍、事々無碍の談も、決して憶說にあらず。如來性中の一員たる個人には、一大宇宙全體の如來の一模塑たること疑ひなし。

表情言語等の察智

人は自己の親愛し愛慕する人は、たとひ千山萬水を隔つとも己が察智は之れが表象を取りて感應同交して其の表象を其目前に現はす。

また他人と應接して彼が內心の事情を言語に詮表す。然るに但だ符號にすぎざる言語を受け自己の察智は之を飜譯して彼が意志の如何を識る。また他人の擧動を見て彼が意志の在る處を察する如きは、彼と我とは身體も精神も別々なるも、本一大共通の點ありて、感應神通して之を察することを得。

美術によりて靈界を察す

感覺を超絕したる如來甚深の境界は言語も及ばざる處なり。然れども人に察智の賦與せらるゝ所ありて察智は能く思想觀察して甚深の境界を把住す。淨土曼多羅の變相は丹彩以て淨土の理想を表象したるものなり。然れ共宗教的天才卽ち察智は此の表象が自己の思考によりて孚化して、生ける啓示として自己の心靈界の淨土に神を優遊せしむ。

唐の善導大師曾て淨土の變相を見て志氣勃然として曰く、神を淨土に栖ませずんば焉んぞ解脫を得んと。粉彩の圖畫は導大師の神をして淨土に優遊せしむるに至る。

經に一人の比丘あり。大菩提心を發せり。一の佛像の相好圓滿にして最も美なり。比丘能く此の尊像によりて思想觀察し佛現前三昧を得たりと。佛像はよく智悲圓滿の德を表象す。察智は是の表象を

把つて自己の心靈をして活ける念佛三昧とはなしぬ。

若しは美術によりて表象せらるゝ、或は天然の美にしても美を表象せるものは、察智の客觀的象相なれば、是に對する人の主觀にある察智は之と感覺相涉して心靈をして優遊せしむ。

表象は察智の客觀態

如來の寵兒たる遺傳として與へられたる人の察智は神秘の甚深不思議の靈相に契悟せんが爲めに、宗教的衝動神的憧憬として人の宗教的理想として衝動す。

其の理想は自己の精神に表象を形成す。美術畫像また自然界の美にしても、其表象は自己の心眼の前に投映し、この察智によるが故に、この自然界と超絶したる靈界とに神通交感し、經に說ける十萬億土をも神通優遊し八功德池に神を浴し七寶林に逍遙して樂むことを得。察智はよく常に今現に在して說法するを聞くことを得。

釋尊は二千數百年の昔既に肉體はクシナの鶴林に別を告げ給ひしも隋の智者大師が法華三昧の定中には靈山一會未散の表象は儼然たり。

啻に天台大師のみならんや、吾人に神秘を開く鑰として與へられたる靈智は、一心に佛を見んとの

戀念となり、皎々たる滿月の相好は心眼の前に彷彿たり。伽耶道場の菩提樹下の正覺の當時、溫乎として光顏巍々たる靈象は吾人の想像に宛然たり。察智の如何を悟らざる徒がかゝる說を耳にせば果して之れ妄想なりと謂はん。よしや妄想と言ふも、かゝる心理作用は何れより出で來りしや。察智は宇宙神秘の藏を開くべきが爲めに與へられ賦與せられたり。人々已に斯の如く四智の形式を具備せり。まして況んや一切を約束する一大原理たる如來に四智本然として具備せざるべけんや。

眞善美と察智

如來の一大心靈體なる宇宙には眞善美あり。之を四智に配せば、眞は圓智、善は理性智、美は感覺智なり。然るに其の眞善美をしてよく眞善美たる眞價を顯はすものは察智なり。

察智は大圓智の光明によつて宇宙眞象を照し是に依て萬物の眞と非眞とを察して眞たるを知る。察智は理性に照して善と非善とを判斷す。感覺によりて差別の萬象を照し、察智は啻に直感に止まらず實在より遊離したる美的假象として存す。

感覺には實感卽ち客觀の物象の實在を實感したるのみにあらず、之を受けて意識の內容として、儼然たる理想的實在を有す。

察智は智性なり。美的は感性なり。察智には感覺より受けたるものについて、之を考察すると共に、其作用の結果として、意識中に現はれたる寫象にして、智性に伴ふ。之を美的假象と云ふ。

また感覺は知覺の材料たるのみにあらずして、感情の資料なり。否な感覺それ自身は知覺よりは寧ろ感性なり。そこで外界より美的感覺に刺激せられて感覺が之を直感するに止まらずして、之を察智の內容に於て、理想的實在として感ずる時に於て、始めて美的假象となる。故に妙觀察智には知力的のみに偏狹なるに非ず。

妙觀察智は主觀よりは觀念と理性の大海をそなへ、客觀よりは感性知性の感覺を受容して意識內容に於て考察し感味す。感覺は客觀の物的實在の理想に表象して、微妙不可思議なる美的假象となる。美的假象は其を惹起したる實在より遊離し、又其を知覺する所の意識作用よりも遊離す。現物を見たる其の客觀實在より優遊するのみにあらず、更に自己の精神自我そのものをも意識作用より遊離す。

美的假象は宗教に於て神秘の妙境に至つて最甚深なり。例せば念佛三昧を修する行者あり。始めに一の丹彩よりなれる金色の形像を緣じて、之に思想觀察して憶念すること最も深刻なり。終に聾盲痴人の如くにして三昧に入る時は、實在より遊離して、自己の理想に、如來の表象は儼然として現前す。神秘の幽玄に入りぬれば、自己其の表象と冥合致一し、其時我其者より遊離し、己を忘却し去る

に至る。

阿彌陀佛止心遠西仁空蟬乃脱果多留聲曾凉志幾とは蓋し此意ならん。

客觀界の美

ハルトマンが若し現象界の萬物に神性の包有を認むることが果して宗教の根本ならんか、宗教と美術との關係は、善眞兩者よりは遙かに密接なりと謂はざるべからず。如何となれば現象界に神性ありと云へば、卽ち美は感覺上に發現せる理想なりと云ふに外ならざればなり。

佛教には如來藏性を離れたる一物なしと云ふ時は、自然界萬物何物か是れ藏性の發現ならざるものぞ。

是れ十佛自境界、世界其のものゝ自性は穢にあらず。穢不淨は之に對する衆生の垢質によりて之を感ずるのみ。

華嚴に佛正覺を成じ給ふ時、一切衆生悉く成佛すと。又曰く、一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛と。觀經に曰く、阿彌陀佛極樂淨土、去此不遠と。法眼を以て世界を觀ずれば處として淸淨國土ならざるなし。

自然界に現はれたる美

自然界本藏性所現また神の理想が客觀に現はれたるものとすれば、微妙なる美的假象の化現かと感ぜらる。天地萬象の壯麗自然界の美に對して赫々として光を放つ辰星また無窮の九蒼の莊嚴に對して言ふべからざる嗟々畏敬の念を起さしむ。また夕陽の光輝の赫々たるには自ら美天國を連想す。また一輪の皓月は天にかゝりながら銀河の浪の中に落る等。

察智と善との關係

個人心の根底は平等性にして一切は內面不可割なり。表面は各々差別をなすも、平等性なるが故に、此と彼との察智には相互に感應して、人の苦樂に對して同感同情と現はる。

若し各自は根底平等性一體にあらざらんか、感應同交の理なし。また察智なからんか相互の感應作用あることなし。

人の眞實の道德は此一體と感應なしに成ずべきものに非ず。各自は內面の一體と感應道交の源の無限より感應の察智に湧出す。同情によりて、人の苦憂に於て自己のと同感し、他の快樂に同情して隨喜す。是等は察智が愛情として現はれたるに外ならず。神聖卽ち無上權威の命令は、平等理性の眞理

が察智の光に依りて、個人の察智に神の聲として良心の聲として現はる。如來の內面なる眞理の光は、人が神の觀念に啓示として、神聖の良心の聲として命令す。

夫婦兄弟朋友等の愛情に於ても、絕對の愛が個人の心情に發表し眞の道德は最大の根底より交通の愛情として現はるゝなるれば、現世の利害や人情的の爲めに制裁せらるゝものに非ず。世の善惡邪正を超えて、是非不二、如來平等を基とす。此の根底を離れたる道德は永遠の基礎たる能はず。また眞の道德と言ふに足らず。

主我の利害また世界動機より割出す所の道德は永遠の基礎たるに足らず。宗教的道德は、至善の源なる如來の大菩提を體得するには、小我を大我に歸して、如來の感應によりて、神聖正義恩寵の源泉より、自己の察智に啓示的に靈的衝動的に發現す。

如來の觀念に、如來の神聖の光は人の良知を照して正道を示し、慈悲は感情及び情操を靈化するが故に、すべての感情及び劣等なる肉慾等を靈化す。

無明の爲めに如來の平等性中の自己なるを識らず、故に主我を執し自他を分別し、主我は我儘勝手にして自己の利のあらん限り他を排斥す。

我執のある智慧は却て眞智を暗らます。

愛の本　神の人格

內面は一大心靈の根底に立つて肉體を有すも釋尊の個體察智に流れ出づる智慧と慈悲とは無限の泉源よる出づ。

釋尊の大悟によりて人は如來の子たり、卽ち大我の小我たることを發明せられたり。釋尊は肉體は人間にして內面は如來なり。

人に煩惱と菩提との二面ありて、肉の煩惱は卽ち罪惡にして、內面根底は如來につながれるが故に、菩提の性なからざるべからず。

如來は、圓智と性智、卽ち大觀念と理性のみなれば、如來に人格を認むること能はざれども、如來の內容を啓示すべき所の察智態あるが故に、人の觀察に感應、感情には歡喜慈悲等と、人の感情に對しては無限の愛として發現す。

此に對する心情には洋々蕩々として體肝かに心寬く。

一切の衆生は同じく同一の根底なるが故に同感同情。恕もこの觀察より生ず。

キリストの愛は、父の愛によりて、萬人の精神と肝膽相ひ通じて、世に一人として罪の子ならざる

ものなきを知る。一心の底から父の愛を體し、萬人の精神と融合するより、根本的の懺悔變革をするに非ざれば、善惡の名自ら空となる。すべての善惡を超絶したる大我と融合し、神秘的精神は眼中汝等の所謂善惡なるものを（羞）とす。汝等の父の全きが如く全からん。

寂光土

娑婆卽寂光。吾人が厭ふべき穢土にありて此の有爲の穢身を捨てず、寂光の淨土に安住せしむることを教ふ。

吾人が天然の意識は因果規定に轉變止むなき世界と見るも、妙觀察智の鑰を以て觀ずる時は常在靈鷲山、此土安穩にして天人常に充滿し、園林諸堂閣種々の寶を以て莊嚴し、法身如來の相好三十二常に此に在て滅せざるを見ん。

神秘合一

自己の精神、神秘合一を體得したる狀態を信と名く。他の精神と自らの交通し得る他の精神の內に己と同情同感するものありて其感應によりて無限の喜と愛とが出づ。

一切を愛する精神から、世の紛々たる衆生を觀察して見よ。小利害か愛憎の爲めに或は鬪爭し或は比周し、彼我に小なる區別あるを知つて、融通の愛のあるを知らず。彼等が善を賞し惡を貶す、或は愛憎は凡て小我の差別妄見から割出し、迷の中の小善小惡小愛小憎に過ぎず。彼の鬪と云ひ衝突と云ひ、一の精神が他の精神と拮抗するより生ず。絶對の慈悲の眼から見れば、すべて融通神秘の波瀾たるに過ぎず。其の波瀾の一々が小我を張つて根本の融通を感得せざるなり。

察智と表象

釋尊は已に肉身は朽つとも佛陀は今尚存在して居る。耶蘇は二千年の過去の人なるも神の子たるキリストは今人の精神と交通し今人の精神を活かす。吾等は永遠の人を抽象的に單に思想の產物として發見し捕捉することを得ず。吾等の精神に永遠の實在を現はし來るに矢張り具體的に時處の關係を有する表象を要す。現世に於る吾等の精神はいかにしても時處の束縛を脫しえず。

吾等が現世に住しながら具象局限の現象の中に、又夫を通じて、一切の變化差別を超えて不變なる實在と交通せしむるものは、觀察智の用なり。

神秘的思想に入つた人が、種々の方法で神秘的直感を試みしが、表象の神秘力を利用するが眼目なりき。或は胸の中に十字架を刻み、或は眼前に聖母を見、或は一呼吸の間に宇宙大我の呼吸に接す。若くは捻華微笑の中に涅槃の大秘に到達し、一の表象を通じて大なる精神と交通す。

音樂の表象が無形の思想感情を傳達するの神秘を考ふれば、是等の宗教家の經驗した神秘は敢て不可思議に非ず。

吾人の思想が一切事物の神秘に注意して探求する時は、凡て耳目に觸るゝもの不思議たらざるなきに至る。此の不思議の中に大なる精神常住の實在の現はれを認めうる。今までの不思議は至大なる光明の中に攝せられて、恰も一切萬物が或青赤各々其色に隨つて一の太陽の光りを現はすが如し。

此に至れば不思議は不思議でなく、凡ての物が眞の永遠なる智慧の裡に照さるゝに至る。是れ神秘の極みなり。此に至れば今まで自明確實と認めし現象界は却て影の如く其實在を失ひ、今までの過境的の遠い不確實の空の如く見て居た不可知が、却つて最も確實なる實在となつて、現實の事物は此の實在の光明によりて、始めて存在と活動との權理を得たるやうになる。「常人の覺めたる所は賢人の

夜なり。賢人が闇黒と見るものを常人は光明と考ふ」。太陽も照す星も月も亦た彼の電光も輝かさるゝ其處に存する火は果して何れより來れるか。一切の物は此輝けるものの反映である。此物の光に依つて宇宙は照さる。

吾等は一切の特殊實在の現象を空なり闇なりと云ふに非ず。只だ根本常住の光に照らさるゝに非ずんば、吾等は此の現象の眞相を見得ずと。常人の夜も神秘の光りによりて忽然として賢人の晝と轉じ得る。凡ての現象は日月や電光の光なり。其等の光りが別々に存在せず却つて其等の供給を仰ぐ、其の源泉の光りに着目する必要を主張す。美術の力も宗教の感化も凡て表現によりて表はるゝ此の神秘の力なり。此の表象の力を認めることは神秘に入る源にて神秘は眞善美の源泉なり。

如來の察智は何處に現ずるや

一大察智は自然界に現はれ、また各自の精神の交通と云ふ一點にあり。美術に於て得らるゝ精神の交通を基とし其精神交感の根底が必要なることを認む。實在に對する吾等の概念は、美術に現はれたる美が現象世界の思想言語には不可說である。概念のみに非ず、あらゆる種類の表象に依つてこれと精神的交通を遂げ吾人の精神を此大神秘の中に遊ばしむるとなす。

之を宇宙精神また大我と稱す。吾人が神秘精神を遊ばしむる狀態は、總て世間の利害得失は勿論世間の思慮活動を超えて時處因果の外に優遊す。此の如き優遊は現世の生活には明かに美の享樂に現はる。

我等を神秘に優遊せしむる媒介は科學美術宗教であつても、其境に入れる人の精神は、神秘の精神と交通し融合し、今まで神秘を認むる媒介の表象として居りし現象の事物を、今度は其の神秘の光りによりて透見するやうになる。一の木の葉から反射する青い光りによつて、太陽の光線の中に青い分子のあることを知る吾等は、今度は太陽の大なる光の一部分として、木葉の青光を見る。自らが同情し深く愛する人との精神交通に依つて、其兩人の間に行はるゝ愛の根底が神秘の大精神から出て居ることを感得す、今度は大なる愛の一の發表として自らの愛を感じて居る。自分等の愛は偶然に起つて世界の束縛に制限されて出て居る生滅の愛でなく、大なる愛の一の波瀾が自分と自分が愛して居るものゝ間を流動して居ることを感ず。彼此同じ神秘の內に生活す。時と處との殘酷なる壁に隔てられても此の精神の交通は妨げられない。天然に對せば天然の愛なり。花が香ひ鳥が歌ひ自分と共に匂ひ歌ふて居る。雄大なる山に對しては自分も雄大なることを山の影に於て見る。恐るべき暴風雨に對しても、其の猛烈なる威力は自分と同一の威力であると。

キリストが野の花空の鳥に對しても、天に在ませる父の愛を感得し、フランシスコが狼に對して汝

兄弟よと云ふて說教した同一の愛である。吾等が此等の愛に同情して此等の人を愛する愛と同一の愛神秘の中に優遊する精神に取りては、一切の事物皆な我ならざるはない。

愛と信

また朋友知人の間の愛には其動機は異にしても、而も互に對手の人格と精神は己と同じものゝ存在を感じて斷金の朋となり、或は死生を共にする戀人となる。此等の愛情は人格の總合精神の交感に基く。此等世間の愛情に己の內に發見しうる對手の人格は人間的人格にて、當に彼我の區別を存す。此等の愛情に全く彼我の區別を容れない樣になりし愛は絕對と稱す。

此等の愛の最も廣く最も之に直接なるものは卽ち宗教の信なり。宗教の心髓は神人合一にあり。神は吾等精神の純淸なる本體にて、若し理想通りに神に對する信愛を現實にするならば、其愛は既に彼我の別を絕して、其信は吾等の精神の本源の故鄕に歸る。

我等は人間である已上は神に對し多少對手と云ふ關係を保つ外なし。人卽神、煩惱卽菩提を完全に實現したる佛陀は、精神卽ち神と同體、本源の故鄕に住する精神なり。卽ち永遠のロゴス。此土卽ち本有の淨土。吾人は光に背けるロゴスなり。彼方に本有の淨土を故鄕とし望まねばならぬ。故に神を

父として愛し神の國を故郷として戀ひ慕ふ。

之に近づく法として等流三昧に佛智との合一彌陀尊の攝取の光明に入らむ。

釋迦牟尼佛は吾無上道を得たりと云ふ自覺によりて、復た生死に流轉せざる（歸）滅の道を敎へ、弟子の心中に不動の信と不滅の法身と永く存すと。

我等人間なれば彼我を絶したる神人合一は至難なり。夫故に愛を現實にしたる神人あれば、此の人格に歸依し捧げて、其人に同情同感し、己を其人格の中に沒し、神に似んことを勉む。

キリストは祈りたり。父よ爾は我が内にあり。吾亦爾の中に住す。此の如く凡ての人も吾等の内にてあらしめよ。

此の信は吾等をして此の世の生活を完うし彼岸の光明に入らしむる力なり。

吾等は神人に對する人間的の同情又神としての信仰に依つて、吾等も亦彼の神人の如く神に似んことを知る。是卽ち人生をして天國ならしむる愛と信と望との源泉なりとす。

信と愛とは二物に非ず。精神の交感から出た人格の融合が愛にて、神人に對する愛が卽ち信なり。此の信によりて、神に似、父と一になるといふ確かな見込みがつけばこれが望となる。

神を父とする故に一切を同胞とし、同一佛性海の中に無漏の佛果を達し得てふ確なる望みによりて

養成せらる。此の望は佛陀の神人を信ずる其信に依つて保證せられ、又實現せらる。故に信望愛は三にして卽一なり。

信なければ大なる望も大なる愛も憎も發し得ず。

共通の精神

一大心靈に繫がれる個々は共通精神となりて、之に由て相互に聯絡す。形式的のみならず活動力にもなり、精神の合する時は人の身體を左右せしむ。或は後へ向はしめ、催眠術の術者が被術者の身體を左右せしめる如き、其他の生物禽獸を感動せる等之なり。

甲乙兩人の精神が相互に合すれば、能動者と所動と一致したる時に一に化して同精神同一形式。

一が衆人を感動す。米のワシントン一人の心は米國數萬の人心を感動せしめ、釋尊の精神は空間にアジア、時間に數千年無數の人心を感動靈化す。釋尊華嚴三昧に蓮華藏界ルシャナ如來盡十方に周徧して重々無盡の境界に優遊する如き之なり。

觀智の二面

宇宙陰陽二動、卽二性能の交感作用。天地位し萬物化育。雌雄兩性の交感。植物生殖の機用なる、雌雄交接の手段として雄蘂より香氣を吐き美色を呈する等。

動物昆蟲の類が交感すべき偶者を呼ぶために、麗しき色を飾り、良き聲を揚げてなく、皆自然界に有する交渉、或は營養の必要よりなり。狐狸の類が本能的の幻通、蛇が本能的の催眠術の如き、人類が言語を以て甲乙の意思相通ずる如き、またすべての感覺によりて其性能を察する如き、六因四緣の關係に衆生の種性をして左右せしむるものは妙智の作用なり。

惡の感應によりて三惡の種性を變化し、善の關係は之善道に應化す。

攝化の感應には終局目的には吾人に感應し、圓融法界の觀智は二千數百年の數千里を隔ちたる釋尊と卽入無碍にして、我心は卽ち靈山の靈會に儼然として顯現し、十萬億土衆寶莊嚴の淨土に六十萬億の紫金色の相好は宛然として交感し、彼有力我無力にして、如來の外に我なき時は、己心淨土唯心の彌陀なり。

如來の神聖正義慈悲智慧法界に周徧し、如來は唯眞理、第一義諦、用相の得べきなし、卽入無碍、理性あるが故に觀察し、感性あるが故に相好を（うく）。

宇宙に內容に充實せる靈智靈能の活動は常恒に存在して機感相應する時は顯現す。一大靈性が性起

具德とは、靈性の內容に靈能の力より一切色心の萬象を生產し、相互の關係に重々無盡の交感參涉して、一切を生じ、一切を開展して妙用ここにあり。

自然規定と自由

約束を脫して自由を得る意志

人の自然の者及び他の動物は、目前の刺激卽ち目前の衝動感情及び感覺に規定せられて、自ら自己意志を規定すること能はず、人の自然に規定せらるゝなり。

自由意志とは、其理性的意志が訓練の結果、動物的衝動を抑制し、人は自己の決意に依て行爲を規定す。

人間は衝動感情に規定せられずして自ら目的思想によりて自己を規定す。故に自由なり。

是の故に自由意志とは目的及び理想により心靈によりて其行爲を規定し、刺激及び目前の欲望によりて之を規定せざるを云ふ。

倫理の自由意志が自然に規定せられざると同じく、宗敎的意識に於ても亦然り。認識を規定するも、自然界の經驗に、感覺は自然の機能が自然の客觀界の物理的に規定せられて感覺をなす。

例へば櫻花に對してまた音樂にすべて所感の境に規定せられて認識す。天地萬物日月、星辰、山河、大地等すべて感覺の境に規定せられて始めて感覺を生ず。之を離れて經驗あることなし。故に內容に於ても自然規定を離れたる經驗あることなし。かゝる人の認識はやはり自然に規定せられたる人にして、未だ心靈界に自由を得たる人にあらず。倫理的道德的の自由を得るのみにあらず、認識またすべての精神生活に於ても、自然規定を離れて心靈的自由を得るに非ざれば、三界の繫縛を免れざるなり。心靈自由を得る時は、肉眼によらずして現在の自然界よりは高等なる自然界を實驗することを得。

心靈自由を得る人は正に容膝の小室の中に於て感覺の自然界よりは廣大なる心靈界を實驗することを得。自然界は如來の力によりて實現せられたる客觀的觀念界なれば、本質を直觀する如きの靈妙なるものに非ず。

心眼開きて靈界を自觀する時は、至美樂園を親しく知見することを得るなり。心靈に入る者は自然の奴隷にあらず。心靈は自然界に超絕せり。

心靈は大乘聖典の教主世尊が實驗し給へる極樂界に神遊す。其淨土の七寶莊嚴寶樹寶地寶池金殿樓閣の莊嚴を見る。

自然規定せられたる自然の奴隷は心靈自由の心靈界の消息を疑ひ、之を空想また妄想ならんと思へ

り。自然の奴隷焉んぞ能く心靈自在の境界を知らん。

心靈界には自然の七寶金銀眞珠寶石等を以て地と爲し、恢廓曠蕩にして限極なし。悉く相ひ雜廁し轉相入間せり。光赫焜燿として微妙奇麗なり。清淨莊嚴一切に超絕せり。衆寶の中の精なるものなり。又其の靈界には妙高山等の諸の山また大海小海谿渠井谷なし。佛神力の故に見んと欲せば卽ち現ず。

心靈界に神遊したる者斯の如きの文に對して焉んぞ心靈の故鄕をおもはざらん。

僅かばかり靈界に向ひて極樂の東門いまだ開かざる間、自然界と靈界の中有にさまよひて、卽ち謂ふ、靈界は洞然たる空界なりと。彼等は消極的に自然界を出づるも、未だ如來の寶殿に到らざるなり。

靈界は自然の寶を以て莊嚴す。此の自然とは自然界にあらず。心靈界の自然にして、物質に非ざるなり。其の微妙にして自然界に超絕するが故に、一切に超へたり。また山河井谷は自在にして見んと欲せば現ずるなり。心靈の自由なること自然界の必然に規定せられたるものの比にあらず。

また其の國の菩薩等は威力自在にして能く掌中に於て一切世界を持せり。

未だ心靈界に一經驗もなきものは、かゝる金文に對して、或は空想なりとし、または死後の冥界な

りとして、正しく自己に關するものに非ずと謂はん。自然規定を脱して心靈の自由を得たる人は、自ら常に實驗する所なり。故に心靈の自由を得たる人は諸の聖者と共に如來本質の眞如の都に優遊す。全く自由を得たるものとす。

實感と美感

實感は實在に對する感覺、美感は美的假象の感情。實在より遊離す。美感は實感の觀念的反象と言ふべし。

ハルトマン氏實感と美感との區別に就て曰く、實感は美感よりも心中に把住力に於て大なり。一度心中に入る時は容易に消滅せず。

假感は實感よりも其の强度に於て遙かに劣れり。是の二者の强度は實物の光と模倣せる光との差あり。故に美感は自把住力に乏し。他の精神現象に驅逐せられ易し。

問、美感は實感の美的假象となれば、觀察によりて得たる影像は美的假象と同じく、自然界の實感の如くに、心中に把住する力は殊なるや。答て、相好感見の如きは全く心靈に感發するものにして、客觀的實在の感覺に伴ふ美的假象とは異にして、全く心眼に於て實感するものにして、肉眼に對する實

感の假象とは全く殊なれり。故に其心中に把持することも强度にして容易に消滅すべきものに非ず。或は華を見明相を見、佛の聖容を拜する如きは全く心眼の實感にして假象にあらず。

また佛の畫像また形像に對して、思想觀察憶想して熏修久して觀成する時、瞑目開目に見ることを得る如きも、全く深く觀達する時は、表象益明了となりて、美感卽實感となる。同く心眼に於て明了に知見することを得。

初めには實在の形像より感覺に印象し、之を觀察智に把住し、終に實在を遊離し、其の表象を想像し、美感其の强度の深さに隨つて、實感の範圍を横領す。

佛の形像を觀察するは、感にあらずして寧ろ觀照ならん。美の感は感なり。觀察する能力は觀察智なり。

現象界は必然

本體界は自由

如來の內容

察智は個人の思想また想像の如きなれば、思考の材料を感覺より受容し、內容を作り、理性が之を

考察の料として、一の理想を造る。

問、如來は個人の如く感覺受動的に非ずして內容は何より來るや。答て、如來を離れたる一物なしとすれば、如來の本質には本然に內容豐富、圓滿に恒沙功德の寂用湛然なれば內容を感覺によりて受けざるも本來圓滿せり。故に衆生の三昧の窓を開きて一切の處に於て諸の淨妙の靈界を現はし、また自然界の方面には天則秩序又萬物を產出す。

美の假象

キヒルマン曰く、美は感興ある實體の理想化せられたる形象なりと。

實體と想體

美は或る實體の形象、想體は實體の形象、實在世界の萬象一度美の範圍に入れば、一切の性質を擧げて是の中に反釀す。故に美は實體の假象なり。假象は空想の所生にあらず。實體と同じく實在して感覺性を有す。

物の世界は物是を造る只だ假象の世界のみ。人の造る所、人は玆に萬物の羈絆を免れて、自己の理想世界を樂しむ。

實體と現體

美の概念を一層精密に説明せんに、第一實體と現體とは區別せらるべし。美の假象となりうべき實體は嘗に經驗上に其實在を認めうべきものゝみならず、單に想像しうべきものをも包含す。例へば宗教の神天使等は、よし科學は其實在を認めざるも、尙ほ實體として美の對象たり。美は凡ての人類に對して美たるべし。故に凡て常識にて實在せりと認めらるゝものは、何れも美の實體たるに妨げなし。

美は一の假象たり。美に生理的美と心靈的美とあり。

美的假象

美は能所一致心境融會の中にあり。

シルレルが、人に理感二性、能動と所動、形式と內容、此二性は人心の二大要素。人類の文明の極は是兩者の圓滿なる調和にあり。人の遊戯をなす時此境に入る。內容動機と形式動機と融合し、必然と自由と。

凡そ人は十分なる意義に於て人たる時に於てのみ戯る。而して戯る時に於てのみ圓滿なる人たり。

古の人は自ら理感二性が渾然として融合し、其節度を失はず。今日の天才の如し。今人は理感二性の一致は理想的となれり。この調和は人文發達の極致なり。

美的假象。美は感性にして觀照に非ず。主觀客觀との調和する處に起り、而して主觀客觀の實在を離れる所に美の假象現はる。

美的假象はそれを起したる實在より遊離せるのみならず、それを知覺する意識作用よりも遊離す。美の極致は客觀實在と共に自己をも忘却して全く純粹なる美象存す。

美感、美的假象感情。美象が或理想內容を適切に表現する時は、假象感情を吾人の心中に惹起すべし。

美感と實感。二者の差は美的假象とそれを惹起す原因たる對境との差なり。美は全く實在より遊離す。美的假象が實在より其の實在性を抽象して、內容を具備する如く、美感は實感の實在性を抽象して內容を具足す。美感は實感の觀念的表象。

純粹なる美感は無關心の快感。美は無關心と云い、無我的なりと云ふは觀念的の我にあらず。美の神秘に入る時は實感より遊離し、實我より遊離し、假我は美的觀照の際美的假象の中に投入す。假我が實我より遊離して投入したるは迷妄にあらず。遊離及び投入は、實我と關はる所なし。人淨土の依

正を觀照して、全く我彼に投入したる時は、我全く彼に入り、入我我入、此心即是三十二相、また七寶莊嚴の美象なり。

自己は彼西方空中美象の靈界に投入し、實我は注意の外にあり。

あみだ佛と心を西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞすゞしき。

自然界中の啓示

汎神教は一切萬物內存の神卽精神なりとすれば、一切無機有機を通じて內存の精神と云ふも、暫く一切の有機物卽ち動植物にも內的生活は精神なりとすれば、植物の生殖作用たる、雌蘂が雄蘂より發生し來る花粉を受けて胞胎する時の兩性交感も有機的不識精神の交感なりと云はざるべからず。雄性の能生と雌性の受容とは心理の理感二性と同一の形式なるに似たり。

動物界の分殖作用卽ち動物的開發に於ても、植物と同じく、有機的內的より自發的なる雄性の生理的作用と雌性の受容能育の兩性との交感によりて新なる動物を開發す。卽ち生殖なり。

心理に能動の理性所動の感性あり。有機物の雌雄兩性、自然物の陰陽兩能、神の一切智と一切能とは、本同一の異現象なりと云はざるべからず。

有機物が兩性の交感によりて開發卽ち分殖すと云ふは、最微少なる生物には雌雄未だ相分たず而も能く分殖す。然れば生殖作用何ぞ夫れ必しも兩性の交感を待て初めて然らん。曰く實に然り、細菌の如きは一個の微粒が自體兩つに分れて分殖す。雌雄未だ分たざるも其內性に於て能發と能養との兩性が自己になかるべからず。彼等は微少なる細胞に兩性の能を存せりと云ふことをうべし。若し原始生物には其性能なきも生物發達の後に自然に兩性能が生じたりとは甚だ不合理なればなり。

萬物の中に內在せるいかに微少なる生物にしても、萬物內在の神の性能を離れたるものなしとすれば、一切の生物は各自其天則の理法に則りて皆小造物の妙用を有せり。

萬物內在の神の性能に能動所動ありて、一切の物心一切萬物が相卽相入交感孚應の性能によりて、自然界の萬物は開發せられたり。

自然界に此妙用の存するは、是一切有機世界を開發するの寶鑰なり。

また自然界を開發する世の學者が、宇宙は本一大元素にして自ら陰陽兩動の力となり、此兩動の感應力によりて天地萬物は造化せられたりとか、また宇宙全一の精神なる神の全能全知ありて萬物に內在し、之によりて宇宙は開發せりと云ふも、同一の宇宙の活ける働きを內外二面の異觀念に過ぎざるなり。

自然萬物は內性は精神にして、其感應の妙智によりて、自然界は常恒開發の妙用をなすと云ふことをうべし。

自然內在の神は一切智によりて萬物に秩序を整齊し、一切能によりて萬物を活動せしめ、一切智能の相卽相入交參無碍の妙智によりて、萬物を開發し生產す。卽ち造化の妙用なり。

自然界中の啓示

萬物內在の妙智は自然界の一切萬物を造化するのみならず、また萬物內在の神は恒に光を放つて人に眞理を示せり。卽ち雲漢星宿を支配する理法と、また林檎の落るに地球の引力あるをニュートンに、蒸氣力の理をワットに知見を與へし如き、自然萬物中に神は在て恒に人に啓示し物理を悟らしむ。また有る人が星宿の中に光を放ちて在せる神、また余の願ふ所の神を外界到る處に於て發見すると同じく、自己の內面にも神を見ると。神の在ます處妙智の存せざるなし。妙智の存する所に向つて深く觀察を用ふる處神秘の門開けざるなし。

自然界の萬物に潛める事物の玄理を精密に研究して、世に紹介する自然科學の如きは、卽ち自然界に潛伏せる理法卽ち神意を人類に啓示するものと云ふべし。

尙ほ自然現象を超絕する萬物の形而上の理法を、自己に與へられたる察智の鑰をもて、若は演繹法

に若は歸納法を以て本體及び宇宙の構成の理を研究するに、理を開くに演繹に事法を察するに歸納の鑰を以てす。

此等は萬有中に存在せる妙智の働なり。

感應

宗教は神人交感、大我小我の調和によりて衆生の知見を開きて、神の眞理を悟らしめ、神の內容卽ち大我と衆生の內容とを融合せしむ。此感應によりて人格を更生し、人の子をして神の子たらしむ。法華に、所謂如來一大事因緣とは、如來の妙法をもて衆生に加被し、衆生をして佛の知見に開示悟入せしむるにありと。卽ち諸法の實相を知見し悟入せしむ。諸法の實相とは、如是相、乃至、如是本末等、一大事の因緣を云ひ、因とは衆生の本有の佛性と過去の善法とにして、緣とは如來の加被力なり。この關係によりて人を更生し佛道を得せしむ。

密家に大日の三密と、衆生の三業を、神秘的致一的に相應せしめ、此加持の力によりて、衆生本有の心地曼荼を開發し、卽身成佛するにあり。

此神人交感によりて衆生の知見を開き、生佛の融合によりて成佛す。

法界をもて身とせる萬物内在の如來の此妙用を妙觀察智となす。此智は生佛感應、加持相應を相とし、衆生の知見を開き、聖靈をもて、人を更生するを用とす。

華嚴宗の十玄緣起は法界の實德にして、法界理事無礙。法界心の體中の色心萬法なれば、一切事理、人法、生佛として相卽せざるなく、法界心用の活動的顯現の色心一切の萬法なれば、相互に交渉して容れざるなし。體用無礙、相卽相入、圓融無碍。

體に相卽の如來を觀じ己を廢して如來を觀ずる時心の擧體卽唯如來相好光明及內包の德相のみとなる。法身を觀ずる時は是心淸淨法身徧一切處にして已に自己沒却す。

心體相卽の宇宙一切の萬法なれば、一切色心事理人法として自己の心性と、心性相卽の如來及淸淨國土を開發顯示して、淸淨法身と相應し、心用自在の如來の相好光明等を念ずる時、相容無礙にして、如來の萬德は自己の內容に交感す。

因果相卽し、生佛相入して、初發心の菩薩の心性卽ち萬德圓滿の如來相を離れず。衆生の三業如來の三密と加持相應す。吾人一心に己を空じて如來を念ずる時、是心是佛、如來正徧知海は心想より生ず。

心體相卽は形式に於て生佛冥合す。心用相入は內容に於て神人感應す。

相卽相入圓融無碍なれば、形式と內容と相互に相照相感、萬物內在の神一切個々の心、悉く此兩性能を具すれば、相互に映現し、帝網の映光重々無盡なり。一塵に遍一切塵刹と相卽相入す。一切塵もまた然り。一塵に無量佛刹を容れ佛刹また安住す。

神秘の妙用。相卽相入圓融無碍の妙用なれば、身は東方に在て心は西方を觀ずる時、東方を移さずして而も西方にあり。身は紛々擾々たる娑婆に在つて、心は寂靜無爲の涅槃界に安立す。

空間に通じ時間に徹して卽入無碍なり。法華に大通智勝佛の時猶し今日の如くに現在すと。經に云く、阿彌陀佛今現在說法と。此身死して後說法を聞くと謂ふなかれ、卽入自在、今現在說法。

法身如來に此體用卽入の乃至重々無盡の妙用あるは、之を妙智とす。

啓　示

如來卽ち眞如の本質は絕待觀念態にて、力に實現せられたる吾人が經驗せる客觀的方面は、實現せられたる一面にて、本質は無礙の觀念態なり。其方面を心靈界また常寂光土と名づく。

妙觀察智は、心靈界の淸淨妙法身具相三十二乃至遮那圓滿の珍御の服を着て、諸の法身の菩薩も相好莊嚴して雲の月を圍むが如く、其中に如來爲めに說法するを示す。

妙觀察智の中には、如來の本質は豐饒にして、經驗界の方面にのみ感覺的に現象するのみにあらず、本質の心界の方面に感覺心象の美天國を現ず。また如來說法すると、如來は神聖正義智慧慈悲等の屬性あるを感ずべし。

人心に感性と理性（性智察智）の二面あり。自然界に對して甲は所動にして乙は能動、甲は外物に規定せらるゝが故に必然の約束をなし、乙は能動にして內より規定するが故に其活動は自由なり。甲は經驗にして、乙は統一にして合理なり。甲の特殊の經驗に對して普徧の判斷を與ふ。甲は內容を供し、乙は形式を供す。

察智は內面の理智と外來の感覺とを調和し、理性と感性との理想狀態をなす。

宗教にて感性より受けたる佛教の畫像を理性は之を自己の能動力を以て實感よりは高等に理想的に把住し、また之を能動的に反映す。

內容能力と形式能力とを調和せる理想は是れ能く表象を反映す。

例へば釋尊靈山常在の靈相の表象に自己の心は優遊し、超然として靈山の淨土に優遊する時溫容在すが如し。諸の聖者は大會に列れり。天人は諸の伎樂を奏し、微妙なる華を散雨する象相は遙かに靉靆たる白雲を排きたる靑天に彷彿たり。是れ肉眼に暈眩せる實感にもあらず、感覺的表象と離れたる

空想にもあらず。

察智は曾て經驗せる感覺を材料とし、理性を以て、察智は之を理想として、客體化して空中に映現したるものとす。

表象に對する無限の美的假象隨伴せり。感性と理性と融合し、能く調和して、自然に理想界に、七寶の宮殿樓閣は雲中に聳え、諸の天人は妙なる伎樂を奏して逍遙して青天に遊ぶを見る。

如來の察智は宇宙察智態なることを知る。

心理的證明は、佛知見開示して如來の中なる自己なれば、宇宙全體如來の一大心靈體。宗教的關係によりて、機能一致的に啓示せらるゝを以て見れば、如來には人の觀察と致一すべき智體なかるべからず。

啓示によりて人の觀察に對して、無量百千の相を知見せしむるを見れば、如來の本質內容には無盡の性相包含せること疑ふべからず。

如來は神聖にして眞理の光を以て我心靈を照臨し、正義を以て善惡を自判せしめ、恩寵を以て吾が心靈に新鮮なる活氣を與へ、感動せしめ、苦難の中に安慰を與ふ。如來による恩寵の觀念によりて靈的活動をなす。

斯く宗教的關係に啓示する如來の方面を妙觀察智と名づく。

嚮きに圓智と性智とは如來は大觀念體、一理智。絶對的寫象と理性とのみと觀じ來りしが、未だ內容特殊の靈象あることを知らざりき。

宗教の精髓及び理性に自性天眞の理性のみにて滿足すべからず。啓示によりて意識すべき如來の本質內容を知見し、それに靈活の力を與へられて始めて心靈の資糧となるべし。

如來の內容を知見せしむるは尤も大事のことなり。

妙觀察智の啓示的關係によりて、如來の本質內容を直接に感應し、卽ち靈應を感じて從來の精神生活を超えて、如來の聖子として聖靈の生命を得たるなり。

宗教最深奥の秘密の藏は啓示によりて開かるゝなり。如來の秘藏內容は理性的光明のみにあらずして、誠に蓮華藏世界遮那圓滿の如來身を觀るべし。如來八萬相好光明遍照は單の理想にあらざることを知見すべし。

心理的證明は如來と心靈との直接の感交より親昵に本質內容に接せり。

觀經に如來是法界身、入一切衆生心想と。法界身とは玄忠大師曰く、意識に對する法界なり。言を換へて云へば觀念界なり。故に入衆生心想とは客觀界の入に非ず。自己の心靈卽ち如來の觀念中にあ

り。自己の心靈開發する時大觀念界に顯現することなり。

佛知見卽ち心靈開發する時、如來の靈界顯現す。如來相好現ず。神聖正義現はる。清淨法界現はる。

人の心靈は大心靈の個體なれば、人の未だ曾て經驗せざりし靈界を顯示するに、人の意識の過境的根底を開展する力は卽ち察智なり。能觀所觀共に如來の察智は個人心靈によりて現はるゝに外ならず。

之が知見を開發せんとする內面の衝動は、卽ち自己に現はれたる察智にして、人の精神中に其形式規律を司る。不斷の活動の根底としては、活動を以て其中に入り來る。善導大師の、佛無礙智を以て衆生心想の中に入る、とは是れなり。入り來ると云ふも、客觀界より來るにあらず。個人根底の一大心靈より發現し來るなり。

人の精神に佛性ありて、佛種は緣より生ずと云ふは、よしや佛性ありとするも佛知見開發せざれば顯動とならず、是れには因緣ありて啓示す。

如來の觀念の機會によりて啓示す。已に開發し來れば如來の外に吾なきを知らん。然れども之を感ずるものは精神なり。

何にしても如來の內容を啓示する妙觀察智は宇宙に充ちて、宗教的關係の規律によりて啓示せらる。直接に交感する自己の精神とは本質に於て一致せざるべからざればとて、人は生理機能なるが故に、全然如來の本質と一なりと云ふべからず。

〈2〉 妙觀察智

一大心靈たる法界體性の屬性とし、絕對觀念と差別の感性と理事交涉し、相卽相入、交參の智相なり。

哲學に云はば一切事物相互の關係に關する處に現るゝ智、卽ち宇宙を構成する諸の部分相互の關係、また全體と部分の關係上に、相互に寫象相照相感の能動と所動の智性が存在す。之を妙觀察智と云ふ。

法身に妙不可思議の智相あり。事物相互に交感孚應の關係によりて、一方には一切智より自然界の萬物を開發し、また宗教には、如來の一切慧をもて、生佛感應によりて、衆生の佛知見を開發し如來の內包を悟達せしむる所の形而上の理性なり。

人の精神作用に相反せる二性あり甲は理性乙は感性也。理性は形式動機感性は內容の動機、卽ち能容と所容。

理性また觀念は自分より他を廣く照覽す。感性は外界の事物の象を受容するより起す心用なり。萬有相互の關係は能動所動に分つ。物質に引力拒力あると同じ。

能觀の智は無限の法界を照し、法界を相卽し、感性は一切の外界の事物の象を受容して、能觀の性と感性と相互に交參相照、相容無碍自在の用あり。

密家には、

六大を法界體性と名づけ、四大を非情と爲す。五大悉く如來三摩耶身と爲し、心色一如、心卽色、無障無碍、智卽境、境卽智、智卽理、理卽智、無碍自在。

六大能く四種法身曼荼羅及三種世間とを生ず。

法界理事法界を通じて一心の體用とすれば、哲學の所謂宇宙精神に形式と內容とに分ち、形式としては一大觀念また理性態なり。大用より顯現せる一切事法界は內容なり。

吾人の觀念等は宇宙の一大觀念と同一にして、觀念及び理性の形式的なるものは、宇宙一體なれば、一切色心等の萬物悉く相卽せざるなし。吾人の觀念の根底全く一大觀念と一致す。而して斯の觀

念界中の宇宙一切萬象なれば、形式に於て相卽す。

空間時間の形式により因果律に規定せられたる萬有は、相互に相卽して遺すことなく、本一體觀念同一理性の衆生及び佛心なり。

吾人が個人精神に形式と內容との二面あり。形式は理性また觀念にして、感性は內容なり。理性等は能動にして自己より外へ發し、感性は所動にして外より自己に受容す。

此觀感の二性によりて、一切彼此の相照相感して、萬物相互に交感孚應し、形式に相卽し、內容に相入す。

能生の六大と所生の法と、都べて能所を絕し、相互交涉相應し、無礙自在。

四曼、大曼一々佛菩薩相好身、三昧耶の所持の標幟等、法曼本尊の種子眞言等、羯磨諸佛菩薩の威儀事業、如是四曼智印其數無量、一々量同虛空、彼は此を離れず、此は彼を離れず、猶空光無礙なる如し。故に四曼不離と云ふ。

三密加持とは、法佛の三密は甚深秘密、一々尊等く刹塵の三密を具して、互に相ひ加入し、彼此攝持して衆生の三密も亦復是の如し。

又三密の金剛を增上緣として能くビル三身の果位を證す。

加持とは如來の大悲と衆生の信心とを表す。佛日の影衆生の心水に影現するを加と曰ふ。行者の心水能く佛日を感ずるを持と名づく。行者若し能く此理趣を觀念すれば、三密相應する故に、本有の三身を證得す。

重々帝網、諸尊刹塵の三密、圓融無礙にして、また生佛重々無盡の鏡中、影像と燈光の涉入する如し。彼身卽是此身。此身卽是彼身。佛身卽衆生身。衆生身卽是佛身。不同にして同。不異にして異。之等無礙。

ビル加持の故に、身無盡莊嚴を示現し、ビルの一切の身語意三業、一切の處、一切の時に、有情界に於て、眞言道句の法を宣說し給ふ。

華嚴には、

妙智の總相、法界若は色、若は心、一切の象相は、一大理性に統べられ、時間空間の中の一切塵沙の差別の萬物を統べ、一切の色心、一々の相、同時態にして前後始終等の別あることなく、一切を具足し而も相參雜せず。海印三昧に炳然として同時に顯現す。海印三昧とは法界の實德、法然の智態。

徧時、徧空、一切色心萬法を盡して、一切卽一、一卽一切、重々無盡の交參無碍の關係の象相を妙智の用とす。

一多相入の關係

一大心靈の萬物は、內容より發現したる一切色心のものには、色心二質に相互に相發相容の性能を具し、相互に涉入し、此相容の關係によりて、自然界の萬物は法界緣起をなし、また人が感覺によりて一切見聞の經驗よりして內容を（充）しむ。物に引力拒力あると同じ。心理に能動所動あり。此兩能によりて、相照相感、能發所發の用ありて、萬物を開發し、發動されし一切の事々の波浪。能入所入の相互の關係、物心二性に各能容所容の兩能を具する故に、一塵に一切塵を容る、一念に一切の心を相入し、一切色心相互の交涉重々無盡。例せば人の一感元質に天體無數の星宿を相容し、また人の腦の一感元質に雜多の事を容るゝ如く、啻に人のみに非ず、一切微塵の中に於て、一切の微塵を相容することも理に於て相同じ。

經に一微塵中現二無量刹一。又云、一切佛刹微塵等、爾所佛坐一毛孔、皆有無量菩薩衆、各爲說法普賢行。

本一大心靈中の不斷に實現せらるゝ一切色心、一個に多數を容れ、多を一に入る。相容とは數多の色心が一個の中に容るゝも、前後なくして、而も一多の相を失はず。

理感二性の關係により、一切の萬象を攝して一に容れ、卷舒同時にして無碍なり。

一多相容の

一個入一　一人ありて意を專らにして一佛を念ず。

一微塵に一法界を常に相入等。

一入一切　一月萬水に浮ぶ。

一佛日一切衆生の心水に應現す。

一切入一　天體無數星辰人の一眼瞳に相入。法界一切塵一塵に入る。

一切入一切　一切衆生相互に一切衆生に相入す。

一切塵々に一切塵々を相容す。

物心、依正、人法、教義、生佛、大小、等の相關に相互相入無碍自在。

法界に斯の相入の關係によりて生佛感應し、如來の恩寵衆生の信念に相容し、心靈を開き知見を與ふ靈力なり。

斯智の妙用によりて自然界の感覺知力等の本性と、卽ち人の知力の能知の智と所知の萬法。

心靈の神秘的に法慧佛の三眼をもて、佛境界の萬法を感應知見せしむ。

體に相卽無礙

一心法界を體とせる徧時間徧空間的の一切の色心、依正、人法、教義等は一大理法に統一せらるゝ萬差の事相なれば、相互に不可割の關係を有す。例へば吾人が眼耳等より乃至一毛一細胞に至るまで各自一の自治體をなすも、一の身體に統一せられ相卽不可離の關聯をなす如し。

圓融法界無盡の緣起なれば、一卽一切、一切卽一、圓融無碍なり。若し同體門に約せば自ら具足して一切の法を攝す。然るに此自の一切復自ら相卽相入して重々無盡。

體の有性と無性とに依つて、相卽自在。相卽とは自を廢して他に同ずれば擧體全く是れ彼。一切の法而も恒に他を攝して己に同ず。彼一切をして卽ち是己體ならしむ。

一多相卽し混じて障碍なし是れ相卽の義なり。上の相容は用の有力無力にして、卽ち彼此互に存し兩鏡相照すが如し。

心體形式相卽の故に、凡夫の心念諸佛の心と相卽し、衆生相卽の如來を念ずる時、自己の心擧體佛心を開く。理に於て己心一切の萬法と相卽、一切の人法依正等に於ても相卽不離なり。時間に於ても相卽す。此一念心體、一大理性、無始無終同時態中の念々なれば、一念一切の念と接續す。

經に、初發心菩薩卽是佛也。此緣起の妙理、始終一齊、始を擧れば卽ち終を得。終を窮むれば方に始に原く。

同異、多少、有無始終、相卽自在にして、一切無盡の法門を具足す。一を擧げて主とせば、餘は卽ち伴と爲る。道理一も差はず。

相卽の關聯は空間に十方を盡して一切萬物悉く關聯し、また時間的に三世の際を徹して連絡す。法性融通の故に無盡緣起し、相由の故に圓融法界無盡緣起、一なければ一切並に成ぜず、此れ法性の實德なり。

因果一齊、無二前後別一。地論に云く、信地菩薩、乃至不思議佛法、爲二一緣起一、以二六相總別等義一、而用括レ之、明知因果俱時、相容相卽、各攝二一切一、互爲二主伴一。

經云、此初發心菩薩卽是佛、故悉與二三世諸如來一等、亦與二三世一一佛境界等。寔以一乘義、因果同體、成二一緣起一。此を得れば彼をう。彼此相卽故、若不レ得者、因卽不レ成、何以故、不レ得レ果故非レ因也。

一乘は一念に卽ち一切教義理事因果等の一切法門を具足す。

相入相卽

宇宙の若は色若しは心、一切の萬象は一大理性に統一せらる。事々の感性と同一理性との關係は、感性は時間空間に塵沙の差別を呈したるも、一大理性に統攝せられて、同時に相應し、一切の色心萬象一々の相同時態にして前後始終の別あることなく、一切の個々を具足して而も相參雜せず。海印三昧に炳然として同時に顯現す。海印三昧とは法界の實德妙觀察智の作用なり。徧空間徧時間一切色心萬象を盡して、一切卽一、一卽一切、一切卽一切、重々無盡の交參關係は斯智の妙用なり。

一多の關係——相入

（用——察智の妙用——個々の感性能入所入相互關係）

一大理性は能發、海水が一切個々の波浪なれば、徧空間時間の中に徧在せる、若しは物若しは心、一塵一念一大理性の發動なれば、相互の關係は、一々に一切を相容し一念に一切の心を入れ、一切相互に交涉し重々無盡なり。

例せば人の一感覺に天體無數の星宿を相容る。人の胸中の感覺のみに非ず。一切の微塵に於ても、互に交涉し相入す。

一入レ一――一衆生と一應身との關係。

一入二切一――一月浮二萬水一、一佛入二一切衆生念一。

一切入レ一――天體星宿無數一の眼球に入る、一壺入二一切金一。

一切入二一切一――一切佛互入一切。

經、一微塵中、現無量刹。又云、一切佛刹微塵等爾所佛坐、一毛孔皆有無量菩薩衆、各爲說普賢行。又、徧滿一切諸法界、一切毛孔自在現。

察智の妙用は自ら然り。焉んぞ思議すべけん。

相卽關係

宇宙に徧時間空間徧在せる物心の萬象は、一大理性の力に依りて顯現せる色心なれば、いかに變化窮りなきも本一大理性が活動して萬物と成りしなれば、相互の關係は一切色心と顯れたるは、一理に相卽し、若し人類に云はば、一切個々の胸を貫いて一理に統一し、相卽し、乃至一切相卽して、重々無盡なり。是察智の理體なり。徧一切が時間空間に盡して一切悉く相卽す。理によりて一貫し事に關聯して無碍。一卽一切なり。

經、初發心菩薩卽是佛故なり。圓融相卽し始終皆齊、一塵卽一切塵、一念卽ち一切念なり。

圓融法界無盡の緣起、一なければ一切並に成ぜず。察智は體は一卽一切、擧一全收、因果俱齊、無前後別。故に因果俱時、相卽相入。初發心菩薩卽是佛故、悉く三世諸如來と等し。亦三世佛境界と等し。悉く三世佛正法と等し。法界を盡し一理、因果同體、一緣起を成し、此れを得れば彼を得、一切相卽の故に。

宇宙萬有若しは色、若しは心、一大理性に統一せられたる一切の色心なれば、相卽して離るべからず。自ら深く觀ぜよ。宇宙全體同一理性に卽したる萬象なることを意識すべし。么少なる生物の微粒と人類と相卽し、生佛一如、淨穢不二、一理智中の一切事々と相卽せざるなし。

力用——一切力用は同じく一理の動力によりて、一切の色心と現じたる萬物色心、一々の感性は相互に交涉し、鏡と鏡と相映照せる如く、法界一切の事々を盡して個心に映じ、相互映飾して相容無碍の力用あり。

理の相卽、感性の相容、體用相互の關係をなすべき性能あるを察智なりとす。

察智形而上の理

如來の一切慧と一切能との關係。一大理智の顯現たる一切の色心なれば、體に於て相卽し用に於て相容し、體に於て交涉し、色心二性、相互の因緣の交感あり。

察智は性は理事の二性、理感二性の關係。能には兩能の關係あり。

萬有兩性兩能の交感關係によりて、天則秩序の造化妙用あらしめ、陰陽二性の兩動力が天地を活動し、雌雄兩性と能との關係によりて、造化の妙用をなす如く、兩性能の交感感應によりて、生殖作用をなす如き。

陰陽交感の理――天地の感應によりて萬物を開發し造化の妙用あり。陰陽二動の感應によりて、天體の星宿は運行す。

宇宙本一大心靈にして、智と能との作用によりて千變萬化無窮の妙用をなす。悉く交感靈智の作用ならざるなし。陰陽二氣は理感二性の自然的現象なり。

一切の生物を通じて、么少なる植物にも、此兩性を一個の中に具備して自ら交感して生殖し、雌雄兩性が體を分つに至つては、兩性合體交感して生殖作用をなす事は、大にしては天地陰陽の感應より一切の生物動植物を通じて、兩性能の交感孚應によりて生殖す。

知能開發の理に於ても同じく兒童に理感二性の伏能ありて、之を教養して理性は內より發育せんとし、感性は外より受容し、佛教に云はゆる本有と新熏なり。

宗教には神人交感の理。卽ち理性は人の本能に一大理性に賦せられて潛伏態なり。感性には神の聖

靈を感ずべき性能を有し、宗教的關係、神人交感の作用によりて、理性は開發し、感性に於ては聖靈に感應し、理性開發する時は自性天眞を知見し、感性に於ては神の靈能宇宙に充滿し無盡の妙理あることを。

宇宙に一大心靈に妙智卽靈知靈能の感應によりて、物心萬物を開發する大用なり。

相卽相入の性能は我一心に如來を念ずる時、吾に力なく如來の靈來りて我が心靈を感化し給ふ。此に於てか入我我入の相卽相入の感應作用あり。感性によりて靈を感じ、理感一致して之を投映して、如來は神聖、慈悲、正義とし啓示す。

此神人交感の關係によりて感應孚化して人格を更生す。イエス已に十字架上にかゝり埋葬せられし後、十一の弟子ガリラヤに往きてイエスを見る。語りけるは、天のうち地の上の凡ての權を我に賜ふ云々。又四十日の間其徒の爲に現はれてイエスが天に昇るを見せたりと。

又ペンテコステの日弟子等一處に集り在り、俄に天より迅風聖靈に滿たされ、聖靈に滿たさしむる者は諸國の、……（斷絶）

諸法相卽關係

宇宙萬有は一大理性に統一せられて不可離の關聯をなす。若しは色、若しは心、一卽一切、一切卽

一、圓融無碍なり。相卽の形而上の理を知らんと欲せば、萬有を統一せる一大理性を認めざるべからず。萬物は此の一大理系に繫れるを以て不可割の關係をなして、時間に相卽し空間に相卽す。

相卽の能卽は理體にして、所卽は事々感性なり。空間は一卽一切、一を擧ぐる時は宇宙萬有を收めて遺すことなく、時間には一念に無量劫を卽して餘なし。

若し相卽の統一せる理性と所卽の事々の感性との二性を離れては萬法緣起不可能なり。

今相卽を離れて一切不可能の理を卑近なるものを以て例せば、體に於て相離るべからざる關係を有するのみにあらず、相卽を離れては萬物は其の能力を失ふ。

例へば人の眼はよく物を視るも人體に卽して始めて視官の能あり。若し人體を離れて眼獨り能く物を視るの作用あらんや。地球は太陽系に卽して地球の功あり。太陽は宇宙に卽して太陽の能あり。萬物一大理性と萬有相互との關係を離れて存在すべきものに非ずして、また各々其能なきなり。

空間に相卽。天體の星宿は地球の如きの諸の星宿と太陽との關係より、太陽系をなし、甲の太陽系と乙の太陽系と網狀をなして、空間に羅列し、實に因陀羅網の如きの不可離の關係を以て相卽し、一一星球に存在せる萬物も此相卽に洩るべきものなし。

時間には無始以來世界は因果次第に關聯し、成住壞空の波をなしながら時間的に聯絡して相卽し、

事相には轉變無窮なるも一理によりて相卽す。

地球の生物進化の連續につきても、原始的生物より次第に向上し發達し、現代の人類に至るまで生命の相續は、子々關聯して相卽して間斷あることなき一系連綿、一を擧ぐれば一切を收む。

個人の生命に於ても托胎の一念より死に至るまで念々關聯して不可斷の關係あり。若し無量の生死ありとせば無量劫に相續して相卽す。

〈3〉 妙觀察智

宇宙一體の萬物なれば一切の物々は相卽す。又萬物は相互に融合し、交渉し相入り相合ふ作用を有す。一が一切に入る。例へば一月天に在つて影萬水に浮ぶ如く、一切が一に入る。天上無數の星宿は眺むる人の瞳中に入る。萬物が相互に體に於て相卽し用に於て相入して碍るなきは妙智の用なり。如來と衆生と感應し無盡々々の法界を凡夫一念中に相入す。佛心と凡心と交渉し、入我我入の妙用より、衆生の知見を開き佛界に悟入せしむるは斯の妙智なり。

相性二智は普徧的にして理性なり。察作兩智は特殊的にして事相なり。

大觀念態の中に無邊の事理の相象を含蓄して、衆生に示す。

宗教に如來大智慧光明中に入りて種々の啓示を與へらるゝは察智なり。

觀念界中無盡の秘密藏を知見することをうるなり。如來內容無盡の秘藏は啓示せらるゝなれば單に理性を以て證明すべからず。

如來內容の秘藏を知見することをうるは、心理的證明、啓示によりて證明する外に由なし。

佛教に三論天台等は大觀念態、一大理智態を眞如實相となす。故に如來常寂光土に清淨法身は絕對理性と絕對觀念とのみなり。純粹清淨の理體の大光明は常寂光土法身なればなり。

眞言華嚴に至つて心靈界特殊の事相、一切萬法悉く大日普門の相にて、四智。

妙觀察智は前の大觀念一理を地體として、又差別の感覺の方とを調和し、雙方を互映するが故に、感覺の事法界と、理智の差別の事相とを照し合せて、事理法界を見る。而して察智は覺智の如く、感覺のみにあらずして、思考觀察の作用ありて、理を以て事を照し、事を以て理に會す。雙方を照會する德あり。

華嚴の四法界　事々無碍

一、理法界――理智。二、事法界――作智。
三、理事無碍法界――察智。
四、事々無碍法界――理性界中の事々圓融無碍――察智。

事々無碍を照會するは、理智を地體とし、感覺の萬事を理に會して、また事々はもと理中の特殊の感覺體なれば、事と理は融通す。事と事とに於ても同一の理。

例へば人の頭腦の一感元質は微細なれども、天體無邊の星宿を容れて餘りあり。大觀念中の無數の星宿なればなり。

理性による察智は、理として未だ經驗せざる宇宙の無邊界の萬物を一感元に收む。一感元は觀念を以て無限の宇宙を大觀す。觀念を扶くるに理智を以てす。宇宙を一貫して遺すことなければなり。

一個人の心性察智に宇宙の萬有の色心を收容すると同じく、一切の個々にまた一切の個々を容れて無碍なり。玆に於て事々無礙論起る。

十玄六相

華嚴に、四法界の事々無礙の理より十玄六相を割出す。

同時具足相應門　十義同時相應し一大緣起となし、前後始終の差別なし、具足圓滿

廣狹自在無礙門　一義毎に多義、多義に一義。

一多相容不同門

諸法相卽自在門　一卽一切、一切卽一、圓融無礙。

秘密隱顯俱成門　此處に隱はれ彼處に顯はれ、不思議同時に。

微細相容安立門　十義一念中に現る微塵に安立。

因陀羅網境界門

託事顯法生解門　十事を別事によせて現はす。

十世隔法異成門　十世隔て異法が同時に、十義は堅に十世に遍すればまた十世に圓融無礙なり。

主伴圓明具德門

十　義

一、教（能詮教　所詮理）　二、理（平等理　差別事）

三、解（見聞解行　實踐修行）　四、因（所修因行　所感果）、

五、人〔能覺　所覺法人〕　六、境〔居住　經歸階境　位〕

七、法〔所了法體　能了知見〕　八、依〔十界依據　十界正據〕

九、根〔衆生根據　衆生樂欲〕　十、體〔諸法本體　諸法體用〕

十義に十番の圓融具足を論ずるを十玄緣起と云ふ。同時具足、上の十義が同時相應。唯心回轉善成門　十義は唯だ如來自性清淨心の性德から轉成す、如來の一心より廻轉して差別の相を現ず。十門の中初めの一は總稱にして他の九つは別稱なり。總別並び擧げ重々無盡の緣起。六相によりて十玄緣起を成立す。

六相

圓融門　　行布門

體——總相。（一含多德）　別相——（多德非一）

相——同相。（多義不相違同成一樣）　異相——（多義相望各異）

用——成相。（由此諸義緣起成故）　壞相——（諸義各住自法不移動）

因陀羅微細境界門　　（註1）他門欠

帝網映現の喩を以て、上の諸法が體用相卽相入自在、隱映互現して重々無盡なるを明す。經に、於二一微塵中一、各示那由他無數諸佛於レ中說法等。又云如三一微塵所三示現一、一切微塵亦如レ是。

體用相卽、因果同時、初後卷舒、悉く一心に圓滿し、乃至法界を塵內に顯はし、寶刹を毛端に現ず。塵性眞に順ずる時は則ち分齊なし。一切の法全く性に依て顯はる。此故に一塵に一切の事を見る。前相卽入自在攝三一切法一盡窮、法界帝網の如くに成ず。

五、微細相容安立門

上の諸義、始終同時に、前後逆順等一切法門を具足し、一念の中に於て同時に齊頭顯現す。

經に、一毛孔中、無量佛刹、莊嚴淸淨、曠然安住。又云、於一塵內、微細國土、一切塵等、皆於中住。

諸の緣起大小の相を壞せずして、同時顯現の義を明す。帝網は重々映現を明し、齊頭炳現は微細に攝す。

六、秘察隱顯俱成門

上の諸義隱顯俱時に成就する義。已に一多緣起、重々無盡、乃至微細安立の義を明したり。

四重無礙。一、處無碍。謂東方卽西方なるを以て、東を移さずして常に西に在り。二、佛無碍。東佛卽西佛故、在二東佛前一卽是在二西佛前邊一也。三、身無碍。在二東身一卽在二西身一故、不レ動二東方一常現レ西。四、出入無碍。出定入定卽入無碍。

七、諸藏純雜具德門

上の諸義或は純或は雜、前の人法等の、若は人門を以て取らば、卽ち一切皆人の故に、純と名づけ、人門に具に理事等一切の法を含む。故に雜となす。例せば菩薩三昧中に布施を行ずること無量にして更に餘行なし。故に純となす。或は一三昧に入て施戒度生の無量の雜行俱時に成ずるを雜となす。法界中の心相卽入の純雜自在具足せざるなし。

八、十世隔法異成門

上の諸義十世中に遍し、同時に別異に具足し顯現す。十世と云ふは過去未來現在の三世各々三世あり。卽ち九世となる。然るに此九世迭に相卽相入の故に總一を成ず。總別合して十世。此十世を具足し、別異同時に顯現して、緣起をなす故に、卽入を得。十世相卽相入。一世を擧ぐれば緣起相由の故に同時具足す。

前の因陀羅等は空間的に諸義の重々無盡の關係を明し、今は時間的に九世互に相卽相入、總別圓

融、無礙自在、相卽相入、一念に無量劫を收め、無量劫を一念となす。十世長短自在無礙。

經に云、或以長劫入短劫、短劫入長劫、或百千大劫爲一念、或一念爲百千大劫、或過去劫入未來劫、未來劫入過去劫、如是自在、念劫無碍。

九、唯心廻轉善成門

此上の諸義唯是如來藏の轉變により、但性起の具德なるが故に、一切緣起は唯藏性の變作したる所にして、此藏性の外に自性なきが故に、上の一切は唯心廻轉なりとす。

十、托事顯法生解門

此上の諸義を顯示するに、具體的に表し、事に托して法を顯はす。謂く理事敎義等の一切の法門を示すに、經の中に十種の寶玉雲等の事相を說くが如く、譬へば法の尊重を顯はす爲に世の寶を以て表示せるが如し。また如意寶の自在なるは上の諸義自在なることを顯はす。

〈4〉 妙觀察智

彌陀無邊光卽ち絕對精神、一切世界の根底にして、大圓鏡の如く、世界は影像の如く、影像の世界

は彌陀の不識精神の自中なることは、觀念證明を以て明したり。

彌陀は意識精神人格の本體たることは心理的證明によらざるを得ず。

彌陀絶對の智慧光は徧ねく法界に周徧して衆生の精神界を照し之に觸るゝ者解脱せざるなし。

彌陀心身徧法界、映現衆生心想中、是故勸汝常觀察。彌陀の絶對不識精神大智慧の光は一切處に周徧して是に感接するものをして其信機を開展し、機能致一的に彌陀の實在を證明することを得せしむ。

心理の證明とは彌陀は意識精神人格の根底なることを證得す。彌陀は自己精神の含蓄なるを以て心理證明として客觀界に覓むべからず。自己精神の根底に向つて觀ずべし。根底卽是絶對無邊の光なるを以ての故に、觀經に是心作佛と、又諸佛正徧知海は心想より生ずと。

人格機制を超越して自己を離れ其根底に到達する時は、我を離れたる絶對精神なれば、其中に顯現し知見せらるゝものは卽ち彌陀なり。佛知見開示しぬれば佛より知見を與へらるゝと共に、自己の知見なれば其深奥なる機能に於ては、彌陀の絶對なる機能と致一せるが故に、彼と我とのへだてなく、客體と主體との別を見ず。妙觀察智は機根に應じて開示を蒙る。人の彌陀と機能致一の狀態なるも、客體には無邊の聖德自然に豐備して缺くる處なきも、唯感覺的に光明相好等のみを啓示せらるゝあり。また寫象的に神聖正義の意志を觀ずるあり。純理想觀念に啓示せらるゝあり。無邊の聖德啓示せ

らるゝに耐へたるものあり。彌陀は平等にして圓滿豐備の體相なれども各自の機能に應じて啓示せらるゝ深淺同じからず。絶對不識の無邊光は精神態なり。何に依てか相好莊嚴を啓示せらる。答へて、此絶對精神は是色の體なるが故に色を現ず。信論に諸佛法身色相を離る、云何ぞ能く色相を現ずと。答へて曰く、卽此法身是色の體なるが故に能く色を現ず。本來已來色心不二なり。色性卽ち智なるを以ての故に色體無形。說いて智身と名づく。智性卽ち色なるを以ての故に說いて法身一切處に徧すと名づく。

天然的の人は機制の生理的過程を以て、精神生活の根底として未だ絶對根底ありと覺らず。已に精神の根底に到つて彌陀の啓示によりて絶對的根底を以て自己の中心とす。是を經に「是心是佛」と云ふ。是心是佛は是心證の啓示が證明するところなり。

是心是佛に非ずして云何が是佛顯現せん。

妙觀察智は彌陀より衆生に智見を與ふるの機能にして機能致一の狀なり。